

483 頸部動脈硬化性病変の血小板シンチグラフィーによる検討

三重野正之、上原 章、橋川一雄、柏木 徹、小塚隆弘
(大阪大学 中放) 井坂吉成(国立大阪病院) 竹崎雅之、
木村和文(大阪大学 バイオ研核医学) 前田宏明、半田伸夫、松本昌泰、鎌田武信(同 第一内科)

今回、我々は血管造影法と超音波断層法により確認された頸部動脈硬化性病変を有する患者を対象として血小板シンチグラフィーを施行した。血小板シンチグラフィーは、 ^{111}In 標識血小板と ^{99m}Tc 人血清アルブミンの2核種を用いて施行し、頸部動脈硬化性病変における血小板集積の有無と動脈硬化性病変の性状との関係につき詳細に検討した。さらに各症例の動脈硬化性病変発症の危険因子についても検討を行なうことにより、血小板シンチグラフィー陽性像の臨床的意義をより明らかにし得たので報告する。

484 脳梗塞又はTIAの ^{111}In -標識血小板シンチグラフィー—頸部RI集積について—

西巻 博、池田俊昭、田所克己、阪井和子、依田一重、中澤圭治、石井勝巳、松林 隆(北里大学病院・放射線科)、神田 直(同・内科)。

我々は、昭和60年5月より昭和63年12月までの約3年7カ月間に、脳梗塞又はTIAにて ^{111}In -標識血小板シンチグラフィーを施行した61症例のうち、ほぼ同時期の脳血管造影所見と比較し得た21症例において、頸部についての血小板シンチグラフィーの所見と脳血管造影所見とを比較検討した。 ^{111}In -標識血小板シンチグラフィーの方法は、標識後約37MBqの $^{111}\text{In}-\text{Oxin}$ 血小板あるいは $^{111}\text{In}-\text{Tropolone}$ 血小板を静注し、約3~4時間後と48時間後に2回撮影した。

血小板シンチグラフィーと脳血管造影の所見は比較的良好に一致した。

485 虚血性脳血管障害における血小板動態について—血小板寿命と血小板凝集能の検討—

井坂吉成、今泉昌利(国立大阪病院循環器科)木村和文(阪大バイオ核)上原 章、橋川一雄、三重野正之(阪大中放)松本昌泰、鎌田武信(阪大一内)

虚血性脳血管障害における血小板寿命と臨床検査の結果を対比検討した。対象は21例、臨床診断はTIA10例、RIND 2例、CS(completed stroke)9例である。血小板寿命と有意の逆相関が認められたのは脳血管造影所見であった。多枝病変のものほど血小板寿命は短縮する傾向にあった。凝集能はADPの $1\mu\text{M}$ にて多枝病変例で亢進していた($P<0.05$)。Collagen $1\mu\text{g}/\text{ml}$ 、ADP $1\mu\text{M}$ の凝集能と血小板寿命は逆相関関係にあった(それぞれ $r=-0.45$, -0.54 , いずれも $P<0.05$)。血小板寿命とCT分類(皮質vs穿通枝系、多発性vs単発性)、病型(TIA, RIND, CS)、罹病期間、血液生化学検査所見との間には有意の相関関係は認められなかった。

486 虚血性脳血管障害におけるin vivo血小板集積とin vitro血小板凝集能の関係

井坂吉成、芦田敬一、今泉昌利(国立大阪病院循環器科・画像診断部)、木村和文(阪大バイオ核)、上原 章、橋川一雄、三重野正之(阪大中放)、恵谷秀紀(国立大阪病院循環器科)、松本昌泰、鎌田武信(阪大一内)

血小板凝集能は、血栓症でよく行なわれる検査であるがその臨床的な意義は明かでない。本研究では虚血性脳血管障害28例および健常例17例での $\text{In}-111$ 血小板シンチグラフィー、血小板凝集能の相互関係の検討から、凝集惹起物質により差異はあるものの、脳卒中におけるin vivoの血小板集積はin vitroの凝集能を低下させる一因となりうることが判明した。この傾向はTIA, CS + RIND群いずれにおいても同様であるが、ことに後者において顕著であり、虚血性脳血管障害の病態把握の上で血小板動態の変化の重要性を示している。

487 In-111血小板Scintigraphyによる大動脈瘤内血栓動態の評価—特に臨床像と比較して—

首藤 裕、本保秀三、古川欽一(東京医科大学外科第2講座)梅田淳一、村山弘泰(同・放射線核医学診断部)

$\text{In}-111$ 血小板Scintigraphy(血小板シンチ)はin-vivoにおける血栓活性を描出するが、我々は大動脈瘤内血栓動態の評価に用い臨床像と比較した。対象は真性大動脈瘤(TA群)11例、解離性大動脈瘤(DA群)12例、術後解離腔遺残例(遺残群)11例で、血小板シンチはtropolone法にて行いRI-Angioと比較、(-)~(3+)の5段階に分類した。TA群では腹部が胸部に比してRI集積は強い傾向を示した。DA群、遺残群ではRI集積の強いものには血栓性閉塞の進行した症例が存在したが、弱い症例で血栓性閉塞の進行した症例はなかった。経過中に末梢への血栓塞栓を併発した症例は強いRI集積を示した。また、同時期の血液凝固系の変動との関連についても述べる。

488 腹部大動脈瘤における血小板シンチグラフィーの有用性および抗血小板剤の効果に関する検討

恵谷秀紀、多賀谷昌史、奥 直彦、金 奉賀、中真砂士、木下直和、額田忠篤、松岡利幸、宇治 茂、鰐谷文男(国立大阪南・循科・放科)、前田宏明、北川一夫、木村和文(阪大一内)、井坂吉成(国立大阪循科)

腹部大動脈瘤での血小板集積に対する抗血小板剤の効果を $\text{In}-111$ 血小板シンチグラフィーで検討した。対象は抗血小板剤未投与時の血小板シンチで動脈瘤に血小板集積を認めた7例である。抗血小板剤未投与時の血小板シンチ施行後、アスピリン投与し再度シンチグラフィーを施行した。7例中アスピリン投与後5例は集積の程度は減弱したもののやはり陽性であり、1例はequivocal、1例は陰性となった。本法は腹部動脈瘤内における血栓形成能の評価と抗血小板剤の効果判定に有用な方法と考えられる。